

精神分析学と幼児の教育 (1)

— 無意識と幼児の心理 —



北見 芳雄

(一) 精神分析学とは

今かりに「精神分析学とはどういう学問か、なにを研究するのか」という質問を提出したとすれば、一般にまだつぎのような返答が多く得られるのではなからうか。

- 1 「それはフロイドの心理学である。」
- 2 「人間の無意識を探究する学問である。」
- 3 「夢に意味があるとし、箱は女性、蛙は男性器というような象徴的解釈を行なう。」
- 4 「すべての心理現象を性欲と結びつけ、幼児にも性欲があると説く。」
- 5 「ノイローゼの治療法である。」など、

さてこの論稿のはじめに、まずこれら精神分析学に関する常識について若干述べておきたいと思う。というのは、これらの常識は精神分析学の特徴を簡単にとらえているとはいふものの、過去において根強く精神分析学に向けられていた偏見と誤解をなお往々にして伴いやすいものであるからである。

1 フロイド 精神分析学の創始者がフロイドであり、現在でもその中心がフロイドの学説にあることに変わりはないが、現代精神分析学はその後の多くの研究者による変化と発展を経ており、初期フロイドの説とは著るしく異っていること。

2 無意識 精神分析学の根底は無意識にあるが、現在では研究上の焦点が無意識から自我の歪み更には自我の発達や適応機能の研究であるいわゆる自我心理学に移っており、従来の心理学とくに

発達心理学とは密接な関係をもち、無意識（深層）心理学は精神分析学の一部にすぎなくなっていること。

3 夢 夢は無意識を理解する最良の素材であるが、その解釈には複雑な手続きと慎重な配慮を要し、決して機械的な夢判断ではないこと。

4、5 性欲 精神分析学への最大の偏見が長い間よせられてきた問題であるが、精神分析学でいう性欲は広い意味をもち、生殖と直接結びつけて普通に用いられている「性欲」とは異なるものであること。また心理現象をより深層の諸傾向との発生的因果的関連から考察することは、精神分析学の特徴そのものであること。

5 ノイローゼ 精神分析学を正しく理解するためには最も大切なこととして、この科学はその初めから現在までノイローゼの治療技法を中心として発達してきたものである。但し現在は、性格障害や精神病など広い範囲の治療に適用されている。

これを要するに、精神分析学とはフロイド以来のおよそ八十年にわたつての変化と発展を含む一大体系であり、精神分析という心理治療技法を基本として広く人間の心を研究する科学なのである。

(二) 心の構造と無意識について

さきに述べたごとく、現代の精神分析学は単なる無意識の心理学ではないが、元来この学問はフロイドが意識の背後に無意識を発見し、ノイローゼの症状や正常心理をもこの二つの心理過程の關係か

ら説明したことに始まるので、最初にこの意識・無意識という面からみた場合の精神分析学での心の構造のとらえ方を述べてみよう。

精神分析学では、人格の上層部が意識の世界であるとみる。(図一参照)意識は感覚を通して外界と接触しており、現在の瞬間に我々の心の焦点が向けられているもの(現在の筆者の意識は本稿を書くことに、読者の意識はこれを読まれることに)を中心とした、狭小

ではあるが鮮明な、いわば心の窓とも言うべき世界で、意識には絶えず種々な心理が連想となって流れている。意識はいわば「理性」にでも主として相当する世界で、自我(後述)の統制力(抑圧)によって無意識(いわば「感情」、「本能」)から区別されている。

人格の上層部である意識と人格の深部を構成する無意識の中間に位置する心理界を前意識とよぶ。これは現在、意識には存在しないが、自由意志によっていつでも意識にもたらずことのできるものが存在する心理界で、例えば我々は、父母の名、友人の顔、○○○など必要とあれば普通いつでも意識化できる。このように我々の知識や記憶といわれるものの殆んどが存在する広い領域をもつ半無意識の世界であるとみる。

これに対して無意識は、特殊な方法(精神分析、催眠)や特殊な場合(夢、精神異常)以外には通常自由に意識化しえないもの、即

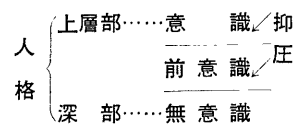


図 1

ち自我の抑圧という特別な力によって意識から隔離され、「感情」とか「性格」といった形で複雑にこねあげられて、意識からは忘却のかなたに追いやられてしまっているもの（幼児期など過去の経験や欲望）の存在する広大な世界と考えられている。

以上のことをもう一度海（心）になぞらえて述べてみると、意識はちょうど、海面に浮かぶ船の上からのぞきこめば、そこに遊泳する魚の存在までもはつきりと識別できるような澄んだ浅海に例えられる。海も段々と深部（前意識）になると太陽光線も弱まり、ここを探るには船底に備えた特殊装置からの光線をあてる（注意）ようが必要がでてくる。海も海面下数百、数千メートルの深海（無意識）になると、普通の方法ではどうにもならず、パチスカーフという探險船の（精神分析、催眠）に乗らざる限りわれわれにはうかがいしれない闇の世界ということになる。

精神分析学は以上のようにわれわれの心はいくつかの層と構造をもつ複雑な装置と考え、その間の働きあいから種々の心理現象が作りあげられるとする。

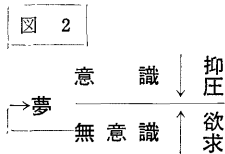
（三） 無意識心理現象としての夢について

次に無意識心理現象の実際例として、われわれの誰しもが毎日のように経験している夢について述べてみよう。

フロイドは一九〇九年アメリカのクラーク大学で行なった講演の中で「夢の解釈こそ無意識理解への大道であり且研究者の誰しもが

おのずから信念を持つようになり、また自己の教育をなすようになる領域である。もし誰かが自分に、如何にして精神分析者になりうるかと問うならば、私はちゅうちょなく、自分自身の夢の研究によってであると答えるだろう」と述べているが、読者の皆様も、御自分の夢を実際に検討されると無意識を理解できることと思ふ。

夢発生の力学のあらすじを示すと、われわれが覚醒している時には意識が心の働きの中心となって無意識内容は抑圧の力で統御されている。（図二参照）ところが睡眠時にはいわば意識が低下し抑圧が弱まるので、相対的に無意識内容、特にそこに抑圧されている欲求の力が強まることとなり、無意識内容が意識に侵入する。しかし、抑圧（↓）の低下のしかた、無意識が存在する欲求の力（↑）はその人、その場合によって異なるので、無意識が意識に混入するしかたも種々あるわけで、ここに意識と無意識の合成物としてのいろいろな夢ができることとなる。比較的無意識の浅い所（前意識）に存在する願望（例えば前日の）が出現する夢は



現実的な、奇想に近い内容の「願望夢」を生むとみられるし、無意識の深い層に強く抑圧されている欲求の出現する夢は歪曲された複雑な内容の夢になることができる。

おとなの夢は一般に歪曲が多く、これを解釈するには精神分析学の細かな専門的知識を

必要とするが、これに反し子どもの夢は単純な願望夢が多いので、前日の体験を考慮することで比較的簡単に解釈を下すことができるので、夢分析の手始めとしては恰好の相手である。

次に筆者の集めたこういう種類の子どもの夢を若干あげてみよう。

一 (幼稚園男子)「僕の欲しいものが一杯僕の手の中に入ってくる夢」

一 (小二女子)「私の家へ上原先生がいらっしやった夢、とてもおもしろかった。先生とお人形さんごっこをしました。」

一 (小四女子)「私の大きな猫をお母さんが捨ててしまったので、いろいろ猫の夢をみました。猫か私の膝の上ののって私と二人で遊んでいました。」

一 (小五男子)「僕は野球がすきだから早大の投手になった。本塁打も十本打った。それから巨人軍に入った。僕が投げると三振を十五本させた。打つ番になった時ホームランで胴あげされてうれしかった。」

もちろんおとなにも時に願望夢が出現する。戦時中の空腹をかかえての軍隊生活では毎晩のようにごちそうの夢が現われるのを筆者らは経験した。『うたたねに恋しき人をみてしより夢てうものを頼みそめてき』という小野小町の感慨をそのまま体験されたかたも少くはないことと思う。

(四) 無意識と幼児心理について

精神分析学の無意識の研究から得られた最も大きな成果の一つは、幼児心理の解明ということであろう。これは当初、おとなの神経症患者の分析治療での知見から構成されたものであったが後には直接、児童の臨床的観察によって裏付けられるに至ったのである。

おとなの無意識の中に、意識からは既に消失している幼児期の経験が残存していることは、夢の中にそれらが再現されることからも理解できる。夢の中では覚醒時の遠慮や思わくなどおとな的な現実配慮が消失して、幼児的な自己本位の願望かおとなげなく活躍するものであるが、夢の中には更に具体的に、幼児期の記憶がありありと復活するものであることは、夢の記録を励行してぶつかる驚きである。

このことはおとなが夢の世界で体験する心理が幼児にあつては殆んどそのまま意識的言動の中に活躍していることを示している。なぜなら、子どもはおとなと違って精神構造がまだ平面的で現実世界と心的内界が、また意識と無意識が未分化な状態にあるため、幼児の言動は、おとなにあつては無意識過程にのみみられる傾向によって支配されていることになるからである。子どもが暗示や催眠にかかりやすいことや子どもの絵や遊びの中にその空想や願望が直接表現されやすいのもその現われなのである。

(東京理科大学、東京・教育・精神衛生研究所)